

# ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける民族意識の形成

原口 岳久

日本大学総合社会情報研究科

## The Formation of Nation Consciousness in Bosnia and Herzegovina

HARAGUCHI Takehisa

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Bosnia and Herzegovina, formerly a part of Yugoslavia, experienced a civil war from 1992 to 1995. This war is well known for its savageries such as ethnic cleansing and the siege of Sarajevo. The western media and intellectuals typically said that there always had been conflicts between nations in the history of Balkan Peninsula and that in the hearts of people there had always been a deeply rooted distrust and hatred to the other nations.

However, if we look into the history of nations (that is the formation of nation consciousness) in this area, it becomes clear that Bosnia and Herzegovina never had a history of repeated conflicts or deep antagonism between different ethnic or regional groups. This fact suggests that the civil war in 1990's is purely a modern problem that was caused by some misleading politicians, not the hearts of common people.

### はじめに

ボスニア・ヘルツェゴヴィナ(以下ボスニアと略す)はバルカン半島の西部に位置する面積約 5 万平方キロ、人口約 440 万人の国家である。ボスニアは旧ユーゴスラヴィアを構成した共和国の一つであり、首都サラエボは 1984 年の冬季オリンピックの開催地になったことにより世界中にその名と美しい景観を知られた。

1992 年サラエボは悲慘な紛争の舞台として再び世界の注目を集めた。砲撃を受け無残な姿をさらす街並、スナイパーの銃弾を避けて生活する市民の姿が何度もテレビで放映された。

ボスニア内戦当時、サラエボの惨状以上に世界に

衝撃を与えたものがある。ボスニア各地で発生した「民族浄化」である。その言葉の余りのインパクトの強さゆえに、ボスニア内戦といえば民族浄化というイメージが定着してしまった。

ボスニア内戦に関し、西側には次のような見方がある。バルカンは民族紛争の巣窟である。過去の紛争によって人々の心の中には異民族に対する不信や憎悪が根深く存在している。今回の紛争はそれが表面化したものである。

しかしこの見方は真実なのであるか。民族の溝とはそんなに深く、何かのはずみで紛争を引き起こさずにはいられないようなものなのか。本稿は、このような疑問を起点としつつ、ボスニア内戦の主体とされる「民族」が歴史的にいかに形成されたか

を考察するものである<sup>(1)</sup>。民族の基盤が人々の「意識」であることから、「民族意識の形成」に着目することによって民族の歴史を捉える。

## 1 民族とは何か

民族は古来存在しているというイメージがあるけれども、英語で言うところのネイション(nation)は近代に登場したものである。

近代以前における人間集団、それも成員間に一定の一体感、連帯感がある集団と言えば、まず血縁、地縁に基づく集団、いわゆる「部族」がある。

また同じ信仰を共有することによって集団意識を持つ「宗教共同体」がある。信者の集団である。教会などによって組織化が進められる場合もある。

また国王の支配下にある人々を「臣民」と呼ぶ。臣民の場合、成員間に一体感や連帯感があるとは限らない。

そして部族よりも規模のより大きい「エスニック共同体」がある。この概念はアントニー・D・スミスによるものである。スミスによるとエスニック共同体の属性は次の通りである<sup>(2)</sup>。

集団に固有の名前

共通の祖先に関する神話

歴史的記憶の共有

一つまたは複数の際立った集団独自の共通文化の要素

特定の故国との心理的結びつき

集団を構成する人口の主な部分に連帯感があること

さて近代になるとネイションが登場し、国内、国際政治の主役となっていく。ネイションは大きく分けて2種類がある。神話型と理念型である。

神話型ネイションは、誇るべき祖先や歴史を共有しているという神話によって成員が統合されている集団である。歴史はしばしば美化され、ドラマチックに脚色され、あるいは都合よく解釈される。それは事実や理論にもとづくものではなく、文学的な言説であり、それゆえに神話と呼ぶにふさわしい。成員がその神話を信じれば信じるほど集団は強固なものとなる。

理念型ネイションは、国家や政治に関する一定の理念によって成員が統合されている集団である。典型的な例は革命期のフランス人とアメリカ人である。フランス革命精神、あるいは自由と民主主義の思想が人々の一体感、団結の基盤となっている。成員がその理念を信奉すれば信奉するほど集団は強固なものとなる。アメリカに典型的に見られるように、理念にもとづくネイションは祖先や歴史の共有がなくとも成立し得る。

ネイションの特徴は、それが近代以降に、意図的に作り上げられたものであるということである。神話型ネイションの場合、まずネイションのリーダーとなるべき人々が登場する。ナショナリストと呼ばれる人々である。彼らは、彼らのイデオロギーによって民衆を啓蒙、教化しようとする。曰く、我々は祖先と歴史を共有するネイションである。ネイションこそが個人のアイデンティティの基盤である。ゆえに我々は団結し、ネイションの利益のため献身すべきである。我々は我々自身の国を持ち、自分たちで自分たちを治めるべきである。このようなイデオロギーをナショナリズムと呼ぶ。

ネイションの本質は、それが人々の「意識」によって成立しているということである。ナショナリストがいくら熱心に啓蒙、教化しても、人々がそれを受け入れなければネイションは成立しない。意識こそが民族の基盤であり、民族意識の形成は民族の形成そのものである<sup>(3)</sup>。

またナショナリズムは主権在民を前提としている。ナショナリストは、政治的主権を持つ個人がネイションとしてまとめられ権利を行使すべきと考える。神話型ネイションの場合、これは民族自決思想と呼ばれる。

なお神話型ネイションは一見エスニック共同体と似ている。エスニック共同体が神話型ネイションの母体となることもある。しかし強力な政治運動によって作り出され、民族自決権を主張するという点で、ネイションはエスニック共同体とは異なる。

神話型ネイションを普通「民族」と訳し、理念型ネイションを「国民」と訳す。また神話型ナショナリズムを「民族主義」と訳す。ここで混乱を生じさせるのは、エスニック共同体も一般に「民族」と呼

ばれることである。そのため民族という言葉の意味が不明瞭になってしまうのである。エスニック共同体がしばしばネイションの母体となること、ナショナリストが両者を同一視することが混乱に拍車をかけてきた。本稿では、民族と言うときは神話型ネイションを意味する。

民族の属性をまとめれば次の通りとなる。

近代の政治運動によって生み出された集団であり、民族自決権を主張する。

祖先や歴史を共有しているという神話が人々の一体感、連帯感の源となっている。

人々の意識によって成立している。

## 2 ユーゴスラヴィアの民族

旧ユーゴの主要民族であるセルビア人、クロアチア人およびムスリムは、6～7世紀に現在の中欧からバルカン半島に南下してきたスラヴ人の子孫である。これらの移住民は、移住当時は明確な差異の無い人々であった(人種と言語が同じ)。しかしその後異なる歴史を歩んだことから、異なる帰属意識や宗教を持つようになったのである。しかし人種と言語が同じであることは今日も変わらない。3 民族の客観的な違いは宗教と使用文字のみである(第1表参照)。

第1表 旧ユーゴ主要民族の差異

民族	宗教	文字
セルビア人	正教	キリル文字
クロアチア人	カトリック	ラテン文字
ムスリム	イスラム	キリル文字

差異と言っても正教とカトリックは同じキリスト教である。文字に関しても、旧ユーゴの人々はキリル、ラテン両方の文字を読むことができる。

目立つのはイスラム教の存在である。ヨーロッパでまとまった数のイスラム教徒が近代初期から存在するのはボスニアのみである。しかしこの点についても留意すべきことがある。それは、ボスニアの一般のムスリムの宗教心はそれほど強いものではないということである。ましてや原理主義とは程遠い。ボスニアのムスリムは、アラブ諸国のムスリムと比

べてずっと世俗的なのである。宗教心がそれほど強くないということは一般のキリスト教徒についても言える。

結局のところ、旧ユーゴの諸民族の客観的差異はたいしたものではない。事実旧ユーゴの人々は外見からは、あるいは少し話をしただけでは民族の区別がつかない。

客観的差異が小さいことは重要なポイントである。これが示唆することは、旧ユーゴの人々の民族アイデンティティ形成においては「意識」が一層重要な役割を担っているということである。90年代の紛争当時は民族主義者によって人々の意識、心理に働きかける宣伝やプロパガンダがさかんに行われた。常套手段は異民族への恐怖心や不信感を煽り立てることである。たとえばボスニアのムスリム指導者はイスラム原理主義者であるという宣伝がなされた。また第二次大戦中のクロアチア人勢力とセルビア人勢力の相互虐殺の記録フィルムがテレビで何度も放映された。異民族に対する恐怖心を煽り立てることで民族主義を高めようという民族主義者の戦略であった。

なお「セルビア」と「クロアチア」の名称はスラヴやバルカンに源を持つものではない。これらはイラン系の侵入者の名称であろうと言われている。しかしこれらの侵入者は数のうえで勝るスラヴ人に同化され、名前のみを残したと考えられている。

## 3 中世のボスニア

中世初期、ボスニアは様々な侵入者によって支配された。12世紀末ハンガリーが宗主権を獲得し、それは中世末まで続いた。しかし宗主権は名目的なものに過ぎず、この間ボスニアは実質的に独立状態にあった。

中世ボスニアの宗教はキリスト教であった。宗派は3つに分かれていた。カトリック、正教、そして当地独自のボスニア教会である。ボスニア教会はカトリックの分派であり、ローマ教皇からは独立していた。15世紀、ボスニア国王がオスマン帝国に対抗するための支援を教皇に求めたところ、教皇は支援の条件としてボスニア教会の迫害を求めた。国王が

これに応じて迫害を行ったため、ボスニア教会は消滅に追いやられた。その信者はカトリック、正教あるいは後にオスマンが持ち込んだイスラム教に吸収された。

ボスニアの人々は概してさほど強い信仰心は持っていなかったと推測できる。その根拠は次の通りである。第一に、三つの宗派はいずれも弱体であった。聖職者は不足し、教会の数は少なく、しっかりした教区組織もなかった。多くの人々は日常的には聖職者を目にすることはなく、教会に足を運ぶこともなかったと推測できる。第二に、支配者層においても、宗派を超えた通婚や同盟、世俗目的のための改宗が見られた。第三に、オスマン帝国時代には多くのキリスト教徒が自主的にイスラム教へ改宗するという現象が見られた。

次に中世ボスニアの人々が自らをどのように呼んでいたのかを見てみたい。当時国境付近には少数ながらセルビア人やクロアチア人を名乗る人々がいた。しかし大部分のボスニアの人々はこのような名称を用いず、「フム人」や「ドーニ・クライ人」といった地方名にもとづく名称を用いた。同時に、ボスニアの人々全体を指すときには「ボスニア人」という名称を用いた。これはボスニア国王の臣民という意味である。これらの名乗りは人々のアイデンティティを反映していると考えられる。

宗教が弱体であったこと、および人々の名乗りを考慮すれば、中世ボスニアには強固な宗教共同体やエスニック共同体は存在していなかったと言える。

## 4 オスマン支配時代

15世紀後半、ボスニアは、当時日の出の勢いであったオスマン帝国に支配された。

オスマン支配はボスニア社会に大きな変化をもたらした。第一の変化は、多数のキリスト教徒がイスラム教へ自主的に改宗したことである。改宗の理由としては、イスラム教が国教となったこと、イスラム教徒になることによって税負担の軽減などの利益があったことがあげられる。ボスニアの人々のキリスト教への信仰がさほど強くなかったことも一因であったと推測できる。

第二の変化は、オスマンの統治方法により、ボスニアに宗教共同体が成立したことである。オスマンはキリスト教徒に改宗を強制することはなかったけれども、民衆を宗教ごとに分類し、管理した。これはオスマン帝国の一般的な統治方法である。正教徒とカトリック教徒はそれぞれ独自の共同体を構成する集団とされた。これによってボスニア社会は、宗教にもとづき、3つの共同体に分割されたのである。

オスマン支配下のボスニア社会は次のような状況にあった。基本的にはムスリムがキリスト教徒を支配していた。行政機関の職員や軍隊の兵士はムスリムによって占められていた。司法の場はイスラム法廷であり、キリスト教徒には不利であった。またムスリムの多くが大土地所有者であった。それら地主の多くはオスマンの軍人の子孫であり、軍役の代償である土地を相続した者たちである。キリスト教徒の多くはムスリム地主の土地で働く小作農であった。

このようにムスリムが支配する社会ではあったけれども、キリスト教徒は「啓典の民」として寛大に扱われていた。正教徒、カトリック教徒とも信仰の自由とある程度の自治を許されていた。

19世紀になるとドイツやイタリアで民族主義が燃え上がり、ほどなくバルカンにも広がった。セルビアでは、オスマン支配への反抗というかたちで民族主義に火がついた。次いでハプスブルク帝国支配下のクロアチアで自治を求める動きが生じた。この過程でセルビアのセルビア人、クロアチアのクロアチア人は民族としての自覚、意識を高めていった。「民族の覚醒」である。

民族として目覚めたセルビアのセルビア人は、ボスニアの正教徒にセルビア人の意識を持たそうとした。他方クロアチアのクロアチア人は、ボスニアのカトリック教徒にクロアチア人の意識を持たそうとした。すなわち「ボスニアの正教徒はセルビア人である」あるいは「ボスニアのカトリック教徒はクロアチア人である」というキャンペーンが行われたのである。歴史的に違う道を歩んできたセルビアの人々とボスニアの正教徒を一つの集団であると主張することは、論理的には強引であるように思われる。しかしこのキャンペーンは功を奏し、ボスニアの正

教徒はセルビア人という意識を、カトリック教徒はクロアチア人という意識を持つようになっていった。ひとりムスリムは民族の覚醒において遅れを取っていた。

このような状況のもとムスリム、正教徒、カトリック教徒のあいだの差異は明確になっていった。ただしこの差異は集団間対立を引き起こすような類のものではなかった。それぞれの集団は互いに寛容であり、交流を持ち、都市部では協力し合う姿が見られた。

このようにオスマン支配下のボスニアでは宗教共同体が形成された。そして末期においてはそれが「民族」に変容しつつあった。

## 5 オスマン支配の終焉

オスマン支配下では少数の地主と多数の小作農という社会構造があり、小作農は地主への貢納と国家への租税という二重の負担に苦しんでいた。地主はムスリムであり、小作農の多くはキリスト教徒であった。1850年代以降地主と農民の衝突が散発的に発生した。1875年ヘルツェゴヴィナで発生した農民反乱はボスニア全土に波及し、農民の一大蜂起に発展した。反乱は地主やオスマン帝国の圧制に対する抗議として始まったけれども、間もなく指導者の中にセルビアとの統一を要求する者が現れた。民族主義の出現である。

経済的問題に起因する社会階級間闘争であったはずの農民反乱が民族主義につながったことは示唆的である。その後のユーゴの歴史においてもしばしば経済問題が民族主義への導火線となっている。経済的に苦しい立場にある人々は、民族の独立によってそれが解決されるという主張に引き付けられるのである。国家の社会経済的政策によるのではなく、民族の独立によって経済問題を解決するのだという議論はいささか乱暴である。しかしこれが人々の心を捉えやすいのも事実である。これを意識という面から考えると、「彼らのせいで我々が貧しい」「彼らのせいで我々が苦しんでいる」という発想から、各個人の心理において「我々」と「彼ら」の分化が進み、民族意識が醸成されやすくなると言える。

さてこの農民反乱はオスマン支配以来の大きな政治的変動をボスニアにもたらすこととなる。騒乱は諸外国の介入を招く。蜂起の翌年 1876 年にセルビアとモンテネグロがオスマン帝国に宣戦布告する。両国は間もなくオスマンに敗れたものの、77 年にはロシアがオスマンに攻め入り、勝利する。ロシアの勢力拡大に懸念を抱いた西欧列強は、78 年にベルリン条約を締結する。ベルリン条約によってボスニアはハプスブルク帝国に統治されることになったのである。

## 6 ハプスブルク支配時代

19 世紀末、ボスニアのセルビア人は教会と学校の自治を求める運動を起こした。その結果ハプスブルク当局は 1905 年にセルビア人の要求を受け入れた。自治運動の過程でセルビア人たちは政治の経験を積み、独自の新聞も発刊した。また運動に参加することによって多くの正教徒がセルビア人としての自覚を持つようになった。政治運動が民族の形成を促したのである。

1907 年にはセルビア人の政治活動家が集まり「セルビア民族組織」という政党を発足させた。「セルビア民族組織」はセルビア本国の民族主義に共鳴し、ボスニアがセルビア人の領土であり、ボスニアのムスリムは民族的にはセルビア人であると主張した。

クロアチア人のあいだでも民族主義運動が進展した。1908 年に結成された「クロアチア民族連合」は、ボスニアがクロアチア人の領土であり、ムスリムはクロアチア人であると主張した。他方 1910 年に「クロアチア・カトリック協会」という政党が宗教指導者により設立された。世俗的な「クロアチア民族連合」に対し「クロアチア・カトリック協会」はカトリシズムへの傾斜が著しく、ムスリムの改宗運動を積極的に進めようとした。クロアチア人の支持をより広範に集めたのは前者のほうであった。

ムスリムも 19 世紀末に自治運動を展開した。「クロアチア・カトリック協会」の改宗運動にも刺激され、信仰と宗教共同体を守ることを目指したのである。当局は 1909 年にムスリムの要求を受け入れ、レイス・ウル・ウレマー職(ムスリム共同体の長とし

て宗教組織および文化活動に責任を負う)およびワクス委員会(寄進財産を管理する)が設置された。

1906 年ムスリムの地主たちは「ムスリム民族機構」という政党を結成した。この政党の役割は小作農の要求をしりぞけムスリム地主の特権を守るというものであった。イスラム原理主義への傾斜は見られなかった。

前述の通り、セルビア人とクロアチア人の民族主義者はムスリムが自分たちと同一民族であると主張し、ムスリムを自民族に引き込もうとした。しかしこの運動はほとんど成果を上げられなかった。ムスリムの知識人のなかにはセルビア人やクロアチア人の民族主義に共鳴した者もいた。しかしほとんどのムスリムは、宗教にもとづく、セルビア人やクロアチア人とは異なる固有のアイデンティティを自覚していた。

このようにセルビア人とクロアチア人は明確な民族意識を獲得し、民族として成立した。その狭間にあってムスリムも独自の集団意識を高めたものの、それは宗教共同体の域を出なかった。ボスニアは二つの民族と一つの宗教共同体によって構成されていたのである。

さて 20 世紀初頭、バルカンで勢力を競うハプスブルク帝国とセルビアとのあいだで政治的緊張が高まった。1906 年ハプスブルクはセルビアからの畜産品の輸入を禁止した。1908 年ハプスブルクがボスニアの併合を宣言すると、セルビアとの関係は一層悪化した。この状況を受けボスニアでもセルビア民族主義が高まった。

そしてボスニア史上最も有名な事件が起こる。1914 年のサラエボにおけるオーストリア皇太子暗殺事件である。実行犯 8 人のうち 7 人はボスニアのセルビア人、1 人はムスリムであった。これを契機として第一次大戦が勃発し、ハプスブルク帝国は崩壊する。そして 1918 年ユーゴスラヴィアが建国されるのである。

## 7 ユーゴスラヴィア時代(第二次大戦以前)

第一次大戦当時、民族主義の思想はヨーロッパにすっかり定着していた。民族自決が戦後処理の原則

となったのはその証左であろう。この時期民族主義は、帝国支配により不当に抑圧された民族が独立を勝ち取るという正のイメージで捉えられていたのである。

「セルビア人クロアチア人スロヴェニア人王国」(1929 年にユーゴスラヴィア王国に改称)も民族自決により創設された国家とされた。自決の主体は「南スラヴ人」とされた。

南スラヴ人とは、バルカンに住むスラヴ系諸民族を総称する民族概念である。すなわち大枠として南スラヴ人という民族があり、その内部にセルビア人やクロアチア人といったより小さな単位の民族が存在するというわけである。南スラヴ人の概念は 19 世紀クロアチアの知識人により提唱され、セルビアでも共鳴者を得た。

しかし南スラヴ人という民族概念は、知識人が作り上げた机上の概念にとどまり、広く民衆に浸透することはなかった。一般の人々は南スラヴ人という意識を持つことはなかったのである。意識なくして民族は存立し得ない。南スラヴ人は「幻の民族」であった。

ユーゴ建国の背後には各民族の意図や事情もあった。まずセルビア人はユーゴ建国を「大セルビア主義」の実現であると考えた。大セルビア主義とはセルビア人が居住するすべての地域をセルビア国家で包含すべきとする民族主義的な思想である。他方クロアチアは、ハプスブルク帝国崩壊に伴う社会的混乱、およびこの地域に領土的野心を持つイタリアの軍事的脅威にさらされ、切羽詰った状況に置かれていた。そのため早急に強力な国家を建設する必要があるが。

異なる思惑を乗せて船出したユーゴは、建国後その矛盾を噴出させることになる。大セルビア主義を背景に国家の中央集権化を進めようとするセルビア人と、クロアチア国家の独立性を確保しようとするクロアチア人が激しく対立したのである。議会は両勢力の対立で常に紛糾し、議会内で発砲事件まで起きるありさまであった。

両民族の対立は第二次大戦中に最悪の結果を招く。開戦後ナチスドイツはユーゴを占領し、傀儡国家「クロアチア独立国」を創設した。ナチスは、ク

ロアチアの極右政党ウスタシャの指導者を新国家のトップに据えた。ウスタシャは領内のユダヤ人とセルビア人の虐殺を行った。セルビア人の抵抗勢力チェトニクは、報復としてウスタシャの協力者と見られるクロアチア人やムスリムを虐殺した。

この惨状のなか共産主義者のグループがナチスに対する抵抗運動を組織した。チトー率いるパルチザンである。チトーはユーゴ諸民族が団結してナチスと戦うことを主張し、すべての民族から参加者を獲得していった。ドイツの強力な軍事力に対してごく貧弱な武器しか持たなかったにも関わらず、パルチザンは民衆の協力とゲリラ戦により解放区を広げ、ほぼ独力でナチスに勝利した。そして戦後チトー率いる社会主義のユーゴが誕生することとなる。

## 8 ユーゴスラヴィア時代(第二次大戦後)

「南スラヴ人」の架空性、建国後の民族対立、そして第二次大戦中の民族相互虐殺を思えば、ユーゴが第二次大戦後再び船出できたことは奇跡のように思える。これはひとえにチトーとパルチザンによるものである。

貧弱な武器しか持たなかったにも関わらず、民族の壁をこえた民衆の団結により、強力なナチスに独力で勝利したことは、パルチザンを「神話」の域にまで高めるに十分なストーリーであった。そして神話の主人公たるチトーはカリスマになった。

すなわちパルチザンの神話とチトーのカリスマ性が新生ユーゴにおいて人々を統合するための要になった。またチトーの統治方法も適切なものであった。チトーは民族の存在を認めつつ、諸民族の団結を説き、民族の平等を徹底し、民族主義的な動きは厳しく抑え込んだ。

スターリンとの対立において一步も引かなかったこと、コミンフォルム追放ののち非同盟諸国のリーダーとなったことで、チトーのカリスマ性は一層高まった。民族を問わず、ユーゴの人々はチトーを敬愛し、ユーゴに愛着を持つようになった。

ネーションという観点から見ると、チトー時代のユーゴにおいては、セルビア人やクロアチア人といった民族とは別に、ユーゴ国民として一つのネイシ

ョンが成立していたと言える。その統合を可能にしたのはチトーのカリスマ性と指導力であった。それはまたユーゴ国民の統合がチトー個人に頼った脆弱なものであったことを意味する。

さてチトーの共産党は民族の平等を説きつつ、5つの民族の存在を承認した。セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人、マケドニア人、モンテネグロ人である。ボスニアのムスリムに関しては、独自の共同体を形成しているものの民族の意識は持っていないというのが党の見解であった。1948年の国勢調査で、回答者は自分の宗教をイスラム教と申告することはできた。しかし民族については、「無申告」という選択肢はあったものの、民族としてのムスリムという選択肢はなかった。この時ボスニアで宗教をイスラム教と申告した人々のうち、8パーセントがセルビア人、3パーセントがクロアチア人、そして89パーセントが「無申告」と申告した。

その後党は、セルビア人やクロアチア人といった従来の民族概念よりも進歩的なものとして「ユーゴスラヴィア人」という概念を奨励した。その背景には、社会主義の発展の中で諸民族はユーゴスラヴィアという概念に収束していくだろうという共産主義者らしい展望があった。1953年の国勢調査では「無申告」という選択肢がなくなり、かわって「民族帰属を明確にしないユーゴスラヴィア人」という選択肢が設けられた。この時ムスリムのほとんどは「ユーゴスラヴィア人」と申告した。

その後党は、国家の分権化と自由化を進めるという方針のなかで、ムスリムを民族として認める方向へと向かった。1961年の国勢調査では「民族的帰属としてのムスリム」という選択肢が設けられた。1960年代には、ムスリムはもはや宗教共同体ではなく世俗的な民族であるとの主張がなされた。1968年党はこの主張を公式に認め、ムスリムは自他ともに認める「民族」となった。すなわち1960年代においてボスニアはムスリム、セルビア人、クロアチア人の主要3民族からなる多民族国家となったのである。

しかし日常レベルにおける民族の意識はむしろ希薄になっていった。戦前までの習慣では、キリスト教やイスラム教の聖者の名前など、民族的背景に

由来するファースト・ネームを付けることが一般的であった。しかし戦後はパルチザンを称賛するような名前が一般化し、従来のようにファースト・ネームから民族を判断することが困難になった。

また戦後の工業化に伴う都市の発展は、都市部の生活の様相を大きく変えた。人口増に対処するためサラエボなどの都市では高層アパートが次々と建てられた。旧市街では民族ごとに居住区が別れていたけれども、高層アパートでは各民族が混住していた。学校や職場でも民族の混在が進んだ。また都市部では異民族間の結婚が当たり前のこととなった。1990年にはボスニアの都市部では異民族間の結婚が40パーセントに達していた。こうした結婚により生まれた子供の多くは特定の民族への帰属感を持たず、ユーゴスラヴィア人やボスニア人と意識していた。都市部では民族がカクテルのように混ざり合っていたのである。

他方農村部では昔ながらの特徴が保持されていた。多くの村は特定の民族しか住んでおらず、異民族間の結婚も都市部に比べて少なかった。

このように第二次大戦後のボスニアではムスリムが民族として成立した。他方都市部を中心に「脱民族」的な動きも顕著に生じた。脱民族の背景としては、近代化による生活環境の変化に加え、ユーゴ国民全体がチトーにより統合されていたことが大きいだろう。チトーがいるかぎり、民族主義が高まり分離主義が生じることは抑えられたはずである。しかし彼は1980年に死去し、一人のカリスマに頼った国家の脆弱さがその後さらされることになる。

## 9 紛争への道

ユーゴを分裂と紛争に導いた要因として次のものがあげられる。第一に、1980年のチトーの死である。第二に、国是としてチトーと共にユーゴを支えてきた社会主義が世界的に凋落していったことである。第三に、80年代にユーゴを襲った深刻な経済危機である。第四に、上記の状況から生じた政治的、精神的空白および経済的不満のなか、ポスト・チトーを狙う政治家の一部が民族主義を権勢拡大の道具として採用したことである。彼らの戦略は成功した。

1990年に行われた選挙において、民族主義政党が軒並み勝利を収め、権力を手に入れたのである。そして彼らは国を紛争に導く。

1990年の選挙で民族主義政党が票を得たことで、ユーゴが民族主義一色に染まったと外部からは見えるかもしれない。しかし事実はそう単純ではないとも考えられる。民族主義者に投票した者のなかには、民族主義に共鳴した者、異民族の民族主義への対抗上自民族の民族主義者に投票した者、単にその候補が同じ民族だからという理由で投票した者の全てが含まれるはずだからである。

確かなこと、そしてより重要なことは、たとえ民族主義者に投票したとしても、ほとんどの人々は民族紛争までも是としていたわけではないということである。当然ながら一般民衆にとっては、紛争で得るものは何も無く、失うものは余りに大きい。民族対立が深まり紛争に突入することによって利益を得るのは、民族対立を権力の源とする政治家のみである。

ボスニアでも1990年の選挙で、民族主義政党がそれぞれの民族から大方の支持を得た。しかしボスニアに関しては留意すべき点がある。ボスニア政府はムスリム主導となったけれども、多民族共存を前提としており、セルビア人やクロアチア人も政権に加わっていたのである。ボスニア政府軍にもセルビア人、クロアチア人がおり、政府軍として同じ民族の民族主義勢力と戦った。

また1992年4月6日にサラエボで起きた事件は、ボスニア内戦の本質を象徴的に示唆する。この日サラエボでは5万人もの人々が平和デモを行っていた。これにはムスリム、セルビア人、クロアチア人が共に参加していた。デモは民族共存の伝統を象徴していた。ところがこのデモ隊に対し、セルビア人民族主義勢力が発砲し、何十もの命が失われたのである。民族主義勢力にとっては、平和と共存よりも、民族の分断と対立が自らの利益に適うのである。このことから、ボスニアにおける真の分裂は、民族間の分裂ではなく、民族共存と平和を願う人々と民族主義勢力との間の分裂であると見ることもできるのである。



## 10 民族意識の形成から見たボスニアの実像

以上、ボスニアにおける民族の形成を「民族意識の形成」に着目して考察してきた。この考察からボスニアの民族についていくつかの点を指摘することができる。

第一に、民族意識は、その時々政治社会状況により、常に変容しているということである。それは民族そのものも常に移り変わっており、決して固定的でも永続的でもないということを意味する。

第二に、民族の歴史は浅いということである。現在と同じ性格の「民族」は近代に入ってから誕生したに過ぎない。ボスニアでは、19世紀末にようやくセルビア人とクロアチア人が民族の意識を持った。それも外部からの働きかけに反応したものであった。その時点ではムスリムの民族的帰属は明確ではなく、セルビア人、クロアチア人の双方がムスリムを自民族に勧誘するという奇妙な事態が生じた。ムスリムが自他ともに認める民族になるのは第二次大戦後のことである。

第三に、1990年代以前のボスニアの歴史においては、民族あるいは宗教をめぐる対立は決して多くなかったということである。中世には国王によるボスニア教会の迫害があった。ただしこれは自主的な行動ではなく、カトリック教皇との取引にもとづくものであった。第二次大戦中はウスタシャとチェトニクの相互虐殺に巻き込まれた。しかしこれ以外に大きな事件は起こっていない。

第四に、戦後のボスニアでは、民族間の壁は決して高くなかったということである。その背景にはユーゴの人々がみなチトーを敬愛し、ユーゴスラヴィアに愛着を持ち、ユーゴ国民として一つのネーションを形成していたことがある。現実の生活においても、とくに都市部の住宅、学校、職場で民族の混在が進み、多民族の共存、協力は当たり前のこととなった。異民族間の結婚が多かったことは特筆に価する。これは異なる民族が融合していくことに他ならないからである。

これらの点を考慮することにより、ボスニア内戦について次のことが言える。

第一に、過去の紛争によって人々の心の中には異

民族に対する不信や憎悪が根深く存在しており、紛争はそれが表面化したものであるという見方にはほとんど根拠がない。

第二に、過去の遺恨がボスニア内戦の主因とは思えないこと、戦後ボスニアでは異民族の融合が著しかったこと、ボスニア政府と政府軍に各民族が参加していたことなどを考慮すれば、ボスニア内戦の構図を「民族対民族の争い」と言い切ることはできない。内戦の真の構図は、内戦をめぐる事実関係の詳細な分析によって今後明らかにされる必要がある。

## おわりに

本稿執筆の時点でユーゴ紛争の終結から10年が経とうとしている。ユーゴ紛争は、チェチェン紛争やルワンダ内戦などとともに「冷戦終結後に噴出した民族宗教紛争」という範疇に括られ、「民族紛争とは恐ろしいものだ」「民族の対立とは根深いものだ」という画一的なイメージで捉えられていたように思われる。恐らく将来の歴史の教科書には「民族紛争の一つ」として記述されるのであろう。

しかしボスニアの歴史や内戦をめぐる事実関係を詳細に見ていくと、「民族紛争」や「民族対立」といった言葉が独り歩きし、事実を見誤らせているように思われる。現実には、単純な民族対民族という構図よりもはるかに複雑だからである。

また国を誤った方向に導き、民族浄化という大罪を犯した政治家の責任を民族対立という言葉があいまいにしてしまうのではないかと、すなわち個人の問題が民族の問題と誤認されてしまうのではないかと、も危惧する。多くの民衆は対立も紛争も望んでいなかった。逆に民族主義を道具とする政治家たちは、民族の分断と対立から利益を得ていたのである。

終結から10年経った今、ユーゴ紛争は人々の記憶から遠ざかり、一つの歴史になりつつある。研究者にとってはこれからが正念場である。紛争を振り返り、その真の構図を明らかにし、将来への教訓としなければならない。

本稿においては、ボスニアの民族の歴史に着目することによって、この地域が決して民族対立と紛争の巣窟ではないこと、従ってボスニア内戦がきわめ

て現代的な問題であることを示すことができたと考ええる。

ボスニア内戦およびユーゴ紛争の構図を解明するために、今後も様々な視点から研究を重ねていく必要がある。

---

(<sup>1</sup>) ボスニアの歴史における事実関係については、主としてロバート・J・ドーニャ、ジョン・V・A・ファイン著(佐原徹哉、柳田美映子、山崎信一訳)『ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史』(恒文社、1995年)に依拠する。

(<sup>2</sup>) アントニー・D・スミス(高柳先男訳)『ナショナリズムの生命力』(晶文社、1998年)52頁。

(<sup>3</sup>) 民族と意識の関係については以下に関連する論述がある。エリ・ケドゥーリー(小林正之、栄田卓広、奥村大作訳)『ナショナリズム』(学文社、2000年)78-80頁。アーネスト・ゲルナー(加藤節訳)『民族とナショナリズム』(岩波書店、2000年)12頁。

**(Received: May 31, 2005)**

**(Issued in internet Edition: July 1, 2005)**